最後の俊寛

梶原　宣俊

俊寛は激怒した。必ず、あの邪智暴虐の平清盛に復讐してやると決意した。

治承元年（一一七七）八月二十七日早朝、朝靄のなかを九州薩摩潟小野湊から、俊寛は護送船に乗り、錦江湾へ滑り出した。乗船していたのは、丹波少将藤原成経（藤原成親の息子）、平康頼、俊寛僧都の三人である。この時成経二十一歳、康頼四十歳、俊寛三十五歳であった。護送役人は、松浦小太郎重賢という肥前松浦党の屈強な武士であった。

船は、一路硫黄島（鬼界島）に向かって進んでいた。風は穏やかで、錦江湾の深い海は、静かな波をたたえていた。

成経と康頼は、神妙な顔をして静かに海面を眺めている。俊寛は初めて見る白煙に包まれた桜島や、富士山によく似た開聞岳（薩摩富士）を珍しそうに、遠望しながら、憎しみに心を震わせていた。

成経が錦江湾の深く青い海を見ながらつぶやいた。

成経「ああ、薩摩がしだいに遠くなる、いつ戻れるのだろうか」

康頼は、静かに

康頼「いつ戻れるかは全くわかりません、ただ、仏のみこころに従うのみです」

成経「我々はなぜこのような目にあったのですか、あの多田行綱の密告のせいではありませんか。行綱め、われわれを裏切るとは実にけしからん」

成経は、しだいに怒りをあらわにした。

康頼「裏切りは人の常です、やむをえません。裏切る方が苦しいか、裏切られる方が苦しいか、いや行綱も、相当悩んで辛かったでしょう、密告すべきか否かと」

成経「私は、ただ父上の言うとおりにしてきただけなのに、何がまちがっていたのでしょう。」

康頼「成親どのは、平家に対する怒りや不満が人一倍強かったからの」

成経「はい、毎日、清盛公への不平不満愚痴を聞かされました

康頼「成親どのは、どうしても清盛公を赦すことができなかったのだ、人を赦すと

いうことは、想像以上に難しいものです。」
成経「康頼どのは、なぜ謀議に参加されたのですか」
成経は、じっと康頼の温和な顔を見つめた。
康頼「私は、平家による支配は、命がけで阻止せねばならぬと考えていました。わが国は、有史以来、天皇・朝廷のもとにまとまり、なんとか平穏に過ごしてまいりました。その朝廷から武士が権力を奪うことは、戦乱の基になると考えたからです。もっとも、鹿ケ谷の謀議には、多少失望しましたが」
黙って聴いていた俊寛がようやく口を開いた。
俊寛「私は、そなたの父、成親に謀られたのじゃ。確かに、平家の横暴と武士による支配には私も反対であった。しかし、謀反を起こそうなどという大それたことは考えてもいなかった。それなのに、成親どのに頼まれて、わが山荘を安易に提供したのが間違いであった。後白河法皇にも恩義があったし・・。しかし鹿ケ谷の謀議は、とても謀反とはいえぬ単なる不満解消の宴ではなかったか。私もあれでは、とても平家を倒せぬと思った。多田どのの密告もやむを得なかったと思うが、それにしても口惜しい。」
成経「何を今更、俊寛どの。見苦しいではないか、すべては私の父のせいになさるのか」
成経は、さらに怒りといら立ちを見せた。
俊寛「そうではない、私の怒りはむしろ事件発覚後の清盛公の対応にある。申し開きを聴き、事実・真実を確認することなく、怒りにまかせて西光を惨殺し、われわれを皆、十把一絡げに島流しにされたことじゃ、これはあまりにも、無謀ではござらぬか」
俊寛も多少声を荒げ怒りを表した。
康頼「確かに、俊寛どのの言われるとおり今回の事件に対する対応は、異常な激怒と予想もつかぬ早い決断と処分であった。清盛公が、平家に対する不満に極めて神経質になられていたということじゃ。権力者というものは、孤独と不安にさいなまれ、こういう残酷なことができるのでしょう。」
成経は、さらに声を荒げて
成経「康頼どの、何をのんきなことを言われるか、われわれは、いま島流しにあい、これから見知らぬ絶海の孤島で、いつまで生きられるかわからないのですぞ、ああ、

私は死にたくない、私はまだ二一歳ですぞ。」
俊寛「ああ、私もまだ死にたくない。愛する家族が不憫でならぬ。できるならば、今ここから海に飛び込み、泳いで薩摩に戻りたい」
海は次第に深い緑色になり、波も荒くなり、イルカが元気よく泳いでいた。
康頼「私は、死ぬ覚悟はできております。権力に反抗するということはこういうことでございましょう。人はみな権力を恐れて口をつぐみ、おもねるのです。安易に権力者を批判し、謀反を企むことは、浅はかであったと今は悔いております。」
康頼は、流される途中、周防の室積で出家し、頭を丸めていた。
俊寛は成るほど一理あると思いながら、大きく深呼吸して遠くを眺め、心の中で自問自答した。
俊寛「何故、私は今、ここにいるのだろうか。島流しは処刑よりもましであると人は言うが、むしろ処刑されたほうがよかったのではないか。私はこれまで、木寺の法印寛雅の子として大事に育てられ、順調に出世し、法勝寺の執行として僧都の位を与えられ、幸せな人生を歩んできた。それが、突然の思いもよらぬ島流しである。天国から地獄へ突き落された気分である。一体どこで、人生を間違えたのだろうか。目前の現実がいまだに信じられない。予想もしない過酷な現実はいつも人を信じさせることができない。私の弱いこころが、現実を直視することを拒否しているのだろうか。これまでの順調な人生に安住し、自惚れていたのが間違いなのか。あるいは、平家の横暴に嫉みと怒りを覚えたのが間違いなのか。鶴の前という女に惚れてしまい、成親の誘いを断りきれなかった弱さが間違いなのか、はたまた、山荘を安易に提供したのが間違いであったのか、考えれば考えるほど頭が混乱する。ここは、ゆっくり過去を振り返りよくよく考えてみよう。」
松浦小太郎重賢は、三人の話を聞きながら、憐憫の情を押さえ、かける言葉もなく、黙って聞いていた。
やがて、船は山川沖にさしかかった。辰巳の風（南東風）にさえぎられ、船は鹿籠の浦（枕崎）に着岸した。ここに一週間ほど逗留し、硫黄島へと向かった。その間、俊寛はひたすらこうなった四か月の激変の経緯を何度も反芻していた。
あれは、四か月前の安元三年（一一七七）四月のことであった。鹿ケ谷山荘の桜がちらほらと散り始めたころ、俊寛は庭に佇み、桜の花の短い命にはかなさを感じ

ていた。
成親「俊寛どのー、ご在宅でございますか」
門前で大きな声がした
俊寛「はい、どなたさまでございますか」
成親「藤原成親でござる」
見ると成親が血相を変えて立っていた。
俊寛「どうぞ、おはいりくださいませ。何事ですか、こんな朝早くに」
部屋に案内し、座るとすぐに
成親「俊寛殿、聞いてくだされ。貴殿もご存知のごとく、このたび左大将に清盛の嫡男、平重盛が任命されました。どう思われますか。せき込むように聴いてきた。
成親の顔は青ざめ、瞳は哀願するように異様に輝いている。俊寛は、一瞬たじろいだが、その真剣なまなざしに慰めを言っても仕方がないと考え、心の思うままに正直に答えた。
俊寛「それは、現在の清盛殿のご隆盛を考えれば、当然の人事でございましょう。」
成親「何をおっしゃられますか、これまでの後白河法皇との蜜月を考えれば、法皇のご意向を尊重するのが筋ではござらぬか。筋からいえば、徳大寺殿や花山院殿ではござらぬか。さらに法皇は私をも推薦なされ、可能性は十分にあると密かに内示までいただいておったのですぞ」
成親は、自分が当然なれると思っていた左大将に、清盛の息子がなったことに対して、怒りと侮蔑をあらわにした。
俊寛「成親殿、まあ落ち着きなされ。最近は、法皇と清盛殿との関係は微妙にすれ違い、法皇との蜜月時代はもう終わったなどと陰口を言う者まで現れておりますぞ。おそらく清盛公は、もう法皇の言いなりにはなるまいと決断されたのでしょう。」
成親「しかし、このままにしておきますと、やがて平家は朝廷をもしのぐ存在になりますぞ、それでもよろしいのですか」
俊寛「はい、それは私も密かに危惧しているところでございます。最近の平家の横暴ぶりは多少目に余るところがございます。時忠にいたっては、平家にあらざれば、人にあらずなどと言いふらしているそうですな」
成親「御意、まことこのままにしておけば、朝廷の権威は地に落ち、やがて平家は、朝廷の上にたつ武士権力の世界を作り上げ、社会を支配することになりますぞ。武

士の軍事力による社会になれば、我が国は暴力が支配し、戦乱の世となりましょう。
俊寛殿、ここは、武家社会の実現を阻止し、朝廷による平和な社会になるようご尽力くだされ」
成親は、どうしても俊寛を仲間にいれようと必死だった。
俊寛「趣旨は、よくわかりましたが、さて、どのようにすればよろしいのですか」
成親「平家を倒すしか方法はありませぬ」
俊寛「しかし、今平家を倒す力のあるものはどこにもございらぬ」
成親「では、私どもが立ち上がりましょう」
俊寛「いいえ、法皇側にその力はございませぬ、成親殿、まあ、落ち着きなされ。ここは冷静に考え、しばらく様子をみたほうが得策と考えます。今日のところはひとまずお引き取りください」
成親は不服そうな顔をしながら
成親「承知いたしました。この話はどうか内密にお願いいたします。また、あらためてご相談にあがります」
俊寛は、成親の後ろ姿を見送りながら、不吉な予感が走った。これは、大変なことになるやもしれぬ。庭の竹林がざわざわと音を立てて揺れ、桜が舞散った。俊寛は、その夜、床の中で眠れぬ夜を過ごした。
俊寛「さて、どうしたものか。成親殿の気持ちもわかるが、とても現在の平家の勢い、実力に対抗できるものはない。仏に仕える身としては、ここは長いものにまかれておくほうが無難であろう。それが、世間の知恵というものだ。しかも、清盛殿は父子二代にたって目をかけてくれて、法勝寺の執行という重責までいただいている。その恩を仇でかえすようなことはとてもできない。成親どのも同様に、父子二代にわたって恩恵を受けてきたではないか。何とか、成親殿の思いを鎮めなければなるまい。」
俊寛は、そう思い定めると、深い眠りについた。
それから一週間後の夕方、成親が、二人の殿上童（女性）を連れて再び、山荘を訪れた。
成親「俊寛どの、成親でござる、今日は、紹介したい方をお連れいたしました」
今回は、さわやかな顔であいさつをした。二人の女性は深々とお辞儀をして顔をあげた。

俊寛「これは、これは、どうぞお入りください」
成親「このものは、私のところに仕えておる者で、松の前と鶴の前という者でございます。今宵は、先日の話は忘れていただき、ゆるりと酒でも飲みながら語り合いましょう」
そう言いながら、酒と肴を差し出した。
松の前「松の前と申します、どうぞよろしくお願い申し上げます」
鶴の前「鶴の前と申します、どうぞよろしくお願い申し上げます」
俊寛は、二人をじっと見つめた。成親は、何故この女性を連れて来たのか、いぶかしく思ったが、二人とも美人であり、元来女性好きの俊寛は深く考えずに、宴が始まった。
鶴の前「まあ、おひとつどうぞ。私は以前から俊寛さまの執行としてのご活躍に敬服いたしておりました。」
松の前「私も同じでございます」
俊寛は、満足そうな顔をして
俊寛「そうか、そなたたちもひとついかがかな」
鶴の前「それでは、お言葉に甘えさせていただきます。」
酌を仕合いながらしばらく歓談した。
成親「それでは、俊寛どの、二人の舞をご覧ください。なかなかのものでございます」
二人は舞の準備をして、今様の舞を優雅に披露した。
俊寛「お見事じゃ、久しぶりに美しい舞を見せていただいた。」
俊寛は、しごく上機嫌になった。第一印象では、「松の前」という女性は鼻筋の通ったなかなかの美人であったが、何か冷たい感じがした。「鶴の前」という女性はそれほど美人ではないが情の深そうな女性であった。舞も、鶴の前のほうが、心がこもっており、色気があった。酒のおしゃくをしてもらいながら、俊寛は鶴の前に心を寄せた。成親は、すでに予定していたごとく、
成親「それでは、夜も更けてまいりましたので、そろそろ失礼いたします」
俊寛は名残惜しそうに
俊寛「まだまだ、よろしいではございませぬか、ごゆっくりなされてください」
成親は、きっぱりと
成親「いや、今日はこれにて失礼いたします。この二人に御用があるときはどうぞ

ご遠慮なくご連絡ください」
と言って、二人を連れて席を立った。成親は、俊寛の気をひくため、わざと早く切り上げたのである。俊寛は、後ろ髪を引かれる思いを押さえながらも、嬉しそうな顔をして、
俊寛「いやいや、これはかたじけない、それではまたご連絡いたします」
　それが、間違いの始まりであった。その後、鶴の前とたびたび密会を楽しみながら、次第に深い関係になっていった。俊寛は、法勝寺の執行という現在でいえば専務理事か事務局長のような立場で、荘園や寺の財政を統括する立場であった。仕事はできるが、僧にしては、血の気が多く、欲も深く、女性に弱かった。鶴の前が身ごもるにいたって、俊寛は野っぴきならぬ状況に追い込まれた。成親は、そこにつけ込み、俊寛を仲間に引き入れようとした。俊寛の実務能力、実行力を高く評価していたからである。俊寛は、成親の策略にまんまとひっかかったことに後から気付くことになる。
　青葉が眼に痛い五月半ば、成親が、法皇をはじめ仲間が集まり大事な会議をするので、山荘を貸してほしいと頼みに来た。実は、最初は法印静賢の山荘の予定であったが、成親が俊寛を巻き込むために変更したのである。すべてを知っている成親の要求を断る勇気は、もう俊寛には残っていなかった。
　鹿ケ谷の山荘は、東山の麓にあった。三井寺に続く由緒ある地で、竹林が鬱蒼として人目につかず、密会をするには最適の場所であった。
　その日、集まった同志は、後白河法皇、浄憲法印、藤原成親、成経、康頼、俊寛、西光法師、成雅、山城守基兼、式部大輔雅綱、宗判官信房、新平判官資行、多田蔵人行綱、それに北面の武士幾人かであった。宴が始まった。しばらくすると、世間知らずの法皇が真っ先に口を開いた
法皇「皆のもの、最近の平家、清盛の横暴断じて許せぬ。清盛は、私の言うことを全く無視しておる。このままでは、朝廷は単なるお飾りになってしまうぞ。早々に平家を討伐し、朝廷による平和な国家を取り戻そうぞ。武士が権力を握るなどあってはならぬことじゃ」
成親「全く同感でございます」
浄憲「法皇さま、めったなことを、軽々しくお口にされてはなりませぬ。どこから平家に漏れ伝わるかわかりませぬ、天下の一大事になりますぞ」

成親は、余計なことを言う浄憲が気にいらず、不機嫌な顔をして、黙って座を立とうとした。そのとき、袖がひっかかり、徳利（瓶子へいし）を倒してしまった。法皇は成親が不機嫌になって座を立ったとは気付かず、

法皇「いかがしたのだ、成親」

成親は浄憲が法皇様に対してさしでがましいことを申すのが気に入りませぬとも言いかねて、さりげなく

成親「いや、瓶子が倒れてしまったのです」

かねてから猿楽が好きな法皇は、喜び笑いながら

法皇「なに、平氏が倒れたとは縁起がよい、者ども猿楽つかまつれ」

猿楽が好きな康頼もすぐに

康頼「ああ、あまりにも平氏（瓶子）が多いので酔いました、猿楽つかまつりましょう」

猿楽の準備を始めた康頼を無視して、

俊寛「さて、倒れた平氏をば、どういたしたものであろうか、ああ酒がもったいない、もったいない」とふざけてみせた。

西光法師「首を切るのが一番よろしいのではないでしょうか」

と言いながら瓶子の首をたたき割った。皆の者は、歓声を挙げ大喜びで、飲み謡い、踊りまわった。

浄憲は、あまりの浅ましさにあきれて、その後口を開くことはなかった。

多田行綱も、ひとり黙って酒を飲みながら「これが、平家討伐の陰謀会議とは笑わせる。平家を甘くみると飛んだ報復を受けるやもしれぬ」とこころでつぶやきながらも、口に出すこともできず早く終わりにして帰りたいと思っていた。

成親「多田どの、どうされましたか、ご気分でも悪いのですか、顔色がすぐれませぬが」

成親は、多田のことが気になり、声をかけた。

多田「いえ、ちょっと飲みすぎたようで」

俊寛もまた、同様に苦々しい思いで酒を飲んでいた。この様子では平家討伐の話はそのうち消えてなくなるだろうと安堵の胸をなでおろしていた。やがて、夜も更け、宴が終わった。

法皇「皆のもの、今宵は楽しかった。今宵のことは内密に頼むぞ。また、集まって

具体策を考えようぞ」
皆の者が「かしこまりました」と恭しく礼をしてお開きになった。
多田蔵人行綱は、翌日から悶々とした日々を送っていた。法皇様にも恩があり、この謀議を清盛公に密告するかどうかで悩んでいた。密告すれば、清盛公のことだから、どんなひどい仕打ちがあるかわからない。斬首や島流しになるだろう。しかし、まさか法皇さままで殺されることはあるまい。ここは、まだ芽が小さいうちに刈り取っておくほうが無難であろう、密告により自分の信頼は増すであろうという考えもひそかによぎった。
そして、一週間悩んだすえ、五月二十九日の夜更けに、決心をして、陰謀を清盛に密告した。清盛は激怒し、六月一日には、法皇様以外全員を捕え、処刑や島流しにした。法皇は、自邸に幽閉した。
中でも西光は、清盛を口ぎたなくののしったので、即座に口を割かれ五条西朱雀で斬首された。
実質的首謀者であった成親は、捕えられたが、清盛の弟教盛の娘を妻にしていたことと、重盛のとりなしにより息子の成経とともにいったん家へ帰された。しかし、六月二日には、備前児島に流され、崖から転落死し、謎の死を遂げた。同じく、蓮浄は佐渡へ、基兼は伯耆（鳥取）、正綱は播磨（兵庫）、信房は阿波（徳島）、資行は美作（岡山）へとそれぞれ流された。藤原成親の子丹波少将成経は、六月二十二日清盛に福原に呼びつけられ、備中国へ、俊寛は白石島、康頼は悪石島に流罪と決定したが、最終的には三人とも硫黄島（鬼界島）に流されることになった。
治承元年（一一七七）九月初旬、護送船は無事外海の荒波を乗り越えて、硫黄島に着いた。硫黄島海岸の褐色の海と青い海のコントラストが異様に光っていた。後方には、硫黄岳の白煙があちこちで、青い空にあがっていた。「ここは、まさに地獄にふさわしい」と俊寛は、心のなかでつぶやいた。護送役人の松浦小太郎重賢が「あれが硫黄島でござる、褐色の海は海底火山のせいでござる」と説明した。成経は、かすかに体を震わせながら
成経「おお、なんと不気味な恐ろしい島であることか、人々が、鬼の住む鬼界島と呼んだのもうなづける。」
康頼は、冷静なそぶりで
康頼「この島でいつまで暮らすのかのー、しかし、鬼が住んでるようには見えませ

ぬなー、鬼は都に住んでるのかのー」

俊寛は、悲痛な面持ちで、じっと近づく島を眺めながら沈黙していた。二人は身を乗り出して、島のほうをじっとくいいるように眺めた。船は、やがて小さな港に入って行った。港の海は近付くとまさに濃い褐色の海であった。後方には硫黄の臭いが充満し白煙をあちこちから噴き出している山がそびえている。それは、地獄と呼ぶにふさわしい光景であった。

重賢が、「ここは、硫黄が出る島なので硫黄島といい、またの名を鬼界島という。近海が黄色に染まっているので黄海が島といったのが、鬼界島になったともいう。」と説明した。

港には数名の地元民が何事かと驚き集まっていた。やがて、島の北にある粗末な庵に案内された。

重賢「それではこれにて失礼つかまつる。どうか、ここで罪を反省し、達者でお暮らしくだされ」

丁重に挨拶をして船に戻っていった。松浦もまた平家の驕りには内心忸怩たるものがあり、複雑な思いで島をあとにした。

翌日から島での過酷な生活が始まった。食べ物を探して毎日、海岸や山を歩き回った。島の住人が、たまには魚や野菜、食料を恵んでくれた。

成経と康頼は、島の生活に慣れると、かねてから熊野三所権現を信心していたので、島でも三所権現を勧請し、早く赦されて都に帰る日のくることを祈った。島には、熊野三所によく似た場所があった。長浜川の蛇行したところを本宮とみなし、港の近くの神社を新宮とみなし、稲村岳の東にある小さな滝を那智の滝と考えてお参りした。

康頼「俊寛どの、貴殿も、ご一緒にお祈りいたしましょう。」

成経「それがよい、さあ参りましょう」

俊寛「いや、拙僧は結構でござる。そなたたちは、武士というのに情けないものだ。そんなに早く反省し、命が惜しいのであれば、なぜ謀議に加わったのか。私は、成経の父成親に謀られて、女性でつまずいたのだ。平家の驕りにたいする反感は確かに存在していたし、法皇さまへの御恩もあり、やむを得ず謀議に加わったのだ。なのに、清盛は私の真実の訴えに耳も貸そうとせず、そなたたちと同様島流しになった。とても許せぬ。今に京へもどることができたなら、復讐の鬼と化して、清盛に

仕返しをしてやる。倍返しだ。神仏に祈ったとて、早く帰られるわけがない。あの、血も涙もない鬼のような清盛に恩赦などの情けがあるものか。いずれ、平家の隆盛はそんなに長く続くはずがない。やがて、第二、第三の謀反、謀議が起こり、遠からず平家は滅びるだろう。」

俊寛は一気にまくしたてた。

康頼「拙者には、都に七十余歳になる老母がござる。どんなにさびしく、悲しい思いで暮らしているかを考えると、いてもたってもおられません。恥ずかしながら、死の覚悟が揺らいでまいりました。成経どの、海岸に流れ着いた板ぎれを拾い集めて、千本の卒塔婆をつくりましょう。そうして、それを海に流しましょう。そうすれば、いつか本国に流れ着き、京にも届くかも知れません。」

成経「それは良い考えだ、早速板ぎれを探しにまいりましょう。」

俊寛「何を、愚かなことをお考えか、そんなことをしても、板ぎれは、大海を彷徨うだけです。」

思い立った二人は、板ぎれを集め、ひたすら卒塔婆つくりに精を出した。それが生きる意欲につながった。板には、二人の歌が書かれていた。

「薩摩潟　沖の小島に我ありと　親には告げよ　八重の潮風」

「思ひやれ　しばしと思ふ　旅にも　なお故郷は　恋しきものを」

思いを込めたこの卒塔婆は、奇しくも安芸の国、厳島神社に流れ着いた。たまたまそれを拾った僧が、京へ持ち帰り康頼の老母や妻たちに見せた。このことは、都中に知れ渡り、後白河法皇も聞き、卒塔婆を平重盛のもとへ送り届けさした。話は、重盛から清盛へ伝わり、重盛の進言により、清盛は、康頼、成経を赦して都に帰らせようという気になってきた。

ちょうどその時、当時十八歳であった高倉天皇の中宮建礼門院（清盛の娘徳子、二十二才）は、後に悲運にあう安徳天皇を妊娠中であったが、身体の調子がとても悪かった。それで、高僧たちに祈禱させたりしたが、なかなか効き目がなかった。そこで、康頼、成経を赦免することになった。しかし、俊寛のみは赦そうとしなかった。俊寛の卒塔婆はなく、清盛が目をかけて厚遇したのに、自分の山荘を謀議の場にするなど断じて許されぬと、怒り心頭に達していたのである。

かくして、治承二年（一一七八）七月三日、赦免状が出された。赦免状をもった、丹左衛門尉基康は七月下旬、都を出て、九月二十日に硫黄島に着いた。

九月下旬、夏の暑さがまだ続く硫黄島海岸を、俊寛がぼろぼろになった衣をまとい、海岸で海草や貝をとっている。成経と康頼は、少し離れて海草や貝をとっていた。俊寛は痛そうな腰をさすりながら、顔を挙げ遠くの海をながめた。かすかに船が見えた。俊寛が最初に発見し「お、あれは船でござらぬか」と声をあげた。

成経、康頼も俊寛の声を聴いて、おもむろに腰をあげた

成経「確かに船のようですな、漁師の船にしては少し大きいようですが」

俊寛はいち早く港に向かって走り出した。船に近付き

俊寛「何用の船でござるか」

基康「赦免船でござる、流人はどこにおられるかな」

俊寛は、瞬間、喜びに体が震えている。

俊寛「私がその流人でござる、俊寛と申します」

基康「成経、康頼はどこにおられるか」

後からついてきた二人が

成経「私どもが、成経、康頼でございます」

喜び勇んで答えた。

基康「そうか。お二人に赦免状がでておる」

成経「え、赦免状ですか」

二人は、にわかに顔が輝き、信じられないという様子である。

基康は静かに赦免状を読み上げた。俊寛は、自分の名前がないことに驚き青ざめた顔で

俊寛「わ、わたしの名前はござらぬか、私は俊寛僧都と申します」

基康「この赦免状には、成経、康頼の二人の名前しかござらぬ」

俊寛「そ、そんなことはないはずだ、よく調べてくだされ、私に確認させてくだされ」

俊寛は、必死になって、赦免状の裏表、表紙を何度も調べた。しかし、どこにも俊寛の名はなかった。

俊寛「これは夢じゃ、夢じゃ。夢なら早く覚めておくれ」

俊寛は、狂ったように叫んだ。

俊寛「同じ罪なのに、なぜ私だけが赦されていないのか」

基康「さて、それは拙者の預かり知らぬこと、拙者は、ただこの赦免状をもって、成経、康頼を連れて戻るように指示されただけでござる」

基康は、官吏らしく事務的に答えた。
俊寛「さては、清盛め、私だけをこの島に閉じ込めて死ぬまでいたぶるつもりか、なんという残酷非道な仕打ちであることか。基康どの、かくなるうえは、後生じゃ情けじゃ、せめて九州薩摩国まででも、私を乗せてくださるまいか」
基康「それはならぬ。そうすれば、拙者の首が飛ぶ。ならぬものはならぬのじゃ。俊寛どの、あきらめてくだされ。そのうちまた朗報があるやもしれぬ。」
　それまで、苦渋の思いで黙って聞いていた二人が口を開いた。
成経「俊寛どの、お気持ちは痛いほどわかり申すが、ここしばらく辛抱してくだされ。都に帰ったら、清盛公に同じように赦免していただくようお願いいたしますから。」
康頼「その通りでござる。必ずや赦免をしていただくよう全力を尽くしますから」
俊寛「そなたたち、よくもそんなことが言えるな、裏切り者が裏切り者を赦せと頼んで誰が赦すものか。この一年間苦楽を共にしてきた仲なのに、私を見捨てて、自分たちだけ帰るのか。えーい、もう誰も信用できぬ。人間は信用できぬ存在である。仏は、私を見捨てられた」
　そう叫ぶと、俊寛は号泣して海岸にひれ伏した。海水が、顔にはじけた。
　丹左衛門尉基康は、泣き叫ぶ俊寛を憐憫のまなざしで見ながら、成経、康頼を船に乗せ、出発しようとした。
　俊寛は、浅瀬に入り、船を追いかけ、康頼の袂をしっかりと握った。基康は、「ならぬならぬ」と俊寛の手を払った。
俊寛「たのむ、せめて向の地九州まででも乗せてくだされ、情けあらば、後生じゃ、後生じゃ」
俊寛はなおも船を追いかける。船頭が艪を振り上げて、俊寛めがけて打ちおろした。
俊寛はその場にひざまづき、波を受けながら、さらに大きな声で泣き叫んだ。
康頼「俊寛殿、落ち着きなされ、我ら都に帰って、清盛さまにお願いして、必ずや、お許しが出るように全力を尽くしますから、もうしばらく、心を強くもって、我慢してくだされ」
俊寛「まことだな、頼むぞよー」
　俊寛は、最後の力を振り絞って叫んだ。船は次第に沖へと進み、船影も人影もついに見えなくなった。あとには、いつもの褐色と紺碧の海が静かに横たわっていた。
　いつの間にか島人たちが集まり、なんと声をかけてよいかわからず、ただともに

涙を流すのみであった。俊寛は、しばらく、浅瀬のなかで声を殺して泣いていたが、やがて、ゆっくりと立ち上がり、浜辺を彷徨い、一晩中歩き続けた。

俊寛「ああ、このまま、海に入って死んでしまいたい。神様、仏様、私は一体どうすればよいのでしょうか。与えられた命を自ら断つことはそんなに重い罪なのでしょうか。世間の人は、自害といえば、現実から逃避しようとする弱い人間がするものだと言うが、そんなことはない。自害には、それなりに深い心の闇があるのだ。自害することによって、自分が生きる、歴史に名を残すこともあるのではなかろうか」

水平線に沈む真っ赤な夕日が、おいでおいでと呼んでいるように思えた。真っ赤な夕陽が見えなくなるまで、俊寛は、呆然と立ち尽くしていた。あの夕陽とともに、この海に沈みたいと思い、頭を突っ込んだ。海水が口に入り、眼がかすんできた。しばらくすると、息が苦しくなり、頭を挙げた。

俊寛「いや、死んでしまったらおしまいだ。わしもまだ若い。死んでしまえば、清盛に敗北したことになる。清盛に対する憎しみや復讐心はどうしたのだ。憎しみや復讐心が生きる希望になることもあるのだ。この苦痛に耐え、生き延びておれば、またどのようなご加護があるやもしれぬ。復讐のチャンスが巡ってくるかもしれぬ。人生は一寸先は闇である。闇のなかに一条の光がさすこともあろう。何とか耐え忍び、やはり、もう少し生きよう、与えられた生を自然死の最後まで、仏様の迎えがくるまで生きてみよう」

俊寛はそう言い聞かせながら、海の中から立ち上がり、浅瀬に向かってとぼとぼと歩き始めた。そして何とか北の庵に辿りついた。庵に着くとそのまま倒れ眠ってしまった。

翌日から、この島に流されてからもっとも辛い日々が続いた。粗末な庵には、誰もいない。成経、康頼の祈る姿が思いだされた。成経がかたみにくれた夜具と康頼がくれた法華経が、静かに光っている。気分転換に都の話をする相手ももういない。海風が、戸をたたきかたかたと音がした。寒い冬は孤独感が、ひしひしと胸を締め付けた。何もすることがないということは、こんなにも辛いことか、都での多忙な日々がなつかしく思い出される。

毎朝、小鳥のさえずりや波の音で起床すると、お経を読むようになった。

川で洗濯をし、地元の方々からいただいた魚や貝、海藻を料理して食べた。する

ことがないので、写経も始めた。ときには、岩や石にも梵字を刻んだ。褐色の海を眺めながら、物思いにふけることもあった。時には、山に登り、はるか薩摩の地が見える大きな岩の上に上がり、大声を出して泣き悶えた。そして考えた。

俊寛「人間は一体何のために生れてくるのか。そして何のために生きるのか。私はいま何のために生きているのだろうか。清盛への復讐のため、家族のため。いや家族のためとはとても言えない。私は、仕事一筋で生き、家族を大事にしてこなかった。「家庭の幸福」がなんとも居心地が悪かった。家庭の幸福のめに、多くの人が妥協し、義を捨てるのを目の当たりにしてきた。義のために、家族を犠牲にする人間が一人もいなかったら、この世はどうなるのか。私が山荘を提供した背景には、そのような考えも潜在していた。生か死か、それが、いつの世でも最大の問題である。仏教の世界観から言えば、人間は生きているのではない。生かされているのだ。無数のご先祖さまのおかげで、自分はこの世に生まれてきた。生れてきてよかったとこころから言えるために生きている。私は、これまで、そのように思ったことがあっただろうか。父母や、清盛入道のおかげで、幸せな前半生をおくることができた。しかし、どこかに、当然という気持ちがなかっただろうか。私は、この島に流されて初めて、人の情けというものを知ったような気がする。島の人々の温かいお世話や、これまでお世話になった多くの方々のことが次々と思いだされる。島流しになる前までは、私はなんと幸せ者だったことか。今から考えれば、天国であった。今は地獄である。地獄を知って初めて天国のありがたさがわかった。そういえば、可愛がっていた家族や待童有王はどうしているだろうか。私のことなど忘れてしまっているだろうか。いや、そんなことはない。有王は極めて忠実な僕であった。必ずや、私を迎えにいつか来てくれるはずだ。」

そう思うと、少し心が落ち着き、沈む夕日を背に受けながら庵へと戻った。海は褐色から黒に変わり、どす黒い海が、怪物のように動めいていた。

それから半年が過ぎた。治承三年三月下旬、俊寛はいつものように、食べ物を探して海岸を彷徨っていた。

前年治承二年の冬、俊寛の待童有王は、都で、俊寛だけが赦されずに、島に取り残されたと聴いて、なんとか俊寛を助け出したいという思いを募らせていた。何とか救出する方法はないものかと思案していた。まず、奈良へ行き、俊寛の娘が潜んでいる叔母の家を訪ねた。これから硫黄島へ行くことを伝えると、これをぜひ渡し

てほしいと。手紙を預かった。

治承三年（一一七九）三月、有王は筑紫へ下り、「薩摩国司の巡視船が春と秋の二回鬼界嶋を訪れる」という話を聞き、薩摩の国をめざした。

薩摩に着いた有王は、俊寛を救出すべく船を出してくれる漁師を探して、薩摩半島の西海岸を北へ向かって歩き回っていた。しかし、国の罪人を密かに救出する冒険とあっては、誰も船を貸すものがいない。やがて阿久根脇本の浜まで来て、ようやく心の優しい一人の漁師が引き受けてくれた。有王は、俊寛の息子であると偽り、父を何とか助けたいと訴えた。

この漁師はつい数年前、薩南から移り住み、律儀者で肝っ玉の太い男であった。かつて、硫黄島近辺まで漁に出かけたことがあり、地理に明るかった。

三月下旬、その漁師の船で巡視船を尾行し、無事に俊寛のいる硫黄島にたどりついた。

港に着くと、有王は地元の人に聞いて、北の庵をめざした。庵の前で、やせ衰えた老人が、ぼろぼろの衣を身にまとい、片手に荒海布、片手に魚をもって立っていた。

有王「俊寛さま、俊寛さまではありませぬか」

老人は、静かに振り返り、じっと有王を怪訝な顔で見つめていたが、やがて、近づいてきた。

俊寛「どなたさまですか。」

有王「私でございます、有王でございます」

俊寛はしばらく、見つめ考え込んでいたがようやく気がついた

俊寛「お前は有王か、確かに有王じゃ。おお、よく来てくれた。待っていたぞ。」

有王「俊寛さま、お会いしとうございました。小さいころからお世話になった有王でございます。おお、こんなにやせ細られて、この二年間ほんとうにつらかったでしょう。」

そういうと、二人はしっかりと抱き合い、大声をだして泣きあった。

俊寛「有王、私は、そなたが必ず訪ねてくると信じておったぞ、これは夢ではないな、断じて夢ではないぞ。いや、本当のことを言うと、一瞬お前が私を忘れ去ったのではないかと疑ったことがある。すまない。許しておくれ」

有王「俊寛さまー」

俊寛「有王ー」

再び、抱き合い大粒の涙を流しあった。俊寛と有王は、粗末な庵で、夜遅くまでともに語り合った。有王から家族の安否を聴き、俊寛はますます落ち込んでしまった。末の娘は、二月に疱瘡でなくなり、妻も心痛のあまり三月二日に亡くなったという。上の娘だけが、奈良に隠れ住んでおり、手紙を預かってきたという。その手紙を読みながら、俊寛は慟哭した。そこには、家族全員が地獄に落ち、苦しんできたことが記されていた。そして、最後に、「父上さま、はやく帰ってきてほしい」と書かれていた。俊寛は、自分だけが地獄に落ちたのではなく家族全員を巻き添えにしたことを今さらながら、深く悔いた。涙がとめどなく流れた。

しばらくすると、俊寛は、頭をあげ、真っ赤になった眼を輝かせ、

俊寛「有王、よくぞ知らせてくれた。心から礼を言うぞ。私はいま、目が覚めた。この島を脱出し、生き延びるぞ、ここで死んでたまるか、この一年何度も死のうと思ったが、清盛への憎しみと復讐心だけで生き延びてきたのだ。有王、脱出を手助けしてくれ」

有王「俊寛さま、声が大きすぎますぞ」

俊寛「いや、心配するな、ここは誰も近寄らない一軒家だ」

有王「俊寛さま、よくぞおっしゃいました。実は、私も俊寛さまを島から連れ出すためにまいったのでございます。手はずはすでに整っております。深夜から早朝にかけて船で逃げましょう」

俊寛「そうか、そうか、さすが有王、礼を言いますぞ、ありがとう。」

有王「しかし、俊寛さま、逃げたことがばれると平家が追ってくるかもしれませぬ。ここは、自害に見せかけて、逃げましょう」

俊寛「うむ、それがよかろう」

深夜、二人は身支度をしてひそかに庵を出た。海岸に出ると、岩場に遺言と平家への恨みと復讐心を刻みこんだ。ぼろぼろになった僧衣を脱ぎ捨て、二人は漁師の船に乗り、沖へと向かった。地獄のような暗黒の海に、月の光が輝き、地獄からの脱出を、俊寛は実感した。白煙をはく硫黄島を眺めながら、感謝と前途の無事を心から祈った。翌朝、船は波にもまれながらも、薩摩に向かって順調に進んでいった。

硫黄島では、村人が、俊寛がいないことに気づき、大騒ぎになっていた。みんなで手分けして探しまわり、やがて岩場の僧衣と文字を発見した。

人々は、ついに俊寛さまは、一人住まいの寂しさから発狂し、海に投身自殺され

てしまわれたと泣くものも現れた。しかし、或るものが、いや、これは自害に見せかけて、島を脱出されたのではないかと言いだした。その証拠に、有王も船も見当たらぬではないか。人々はそういえばそうだなと思いはじめた。長老が、重い口をあけ「いや、俊寛さまは、自害なされたのじゃ、島での孤独で辛い生活を思えば当然のことじゃ。みなのもの、決して島から逃げ出したなどと口外してはならぬぞ。さあ、お弔いをして墓の準備をしようぞ」人々は、長老の深い思いやりを直感的に理解した。

現在でも、俊寛は硫黄島で死亡したことになっており、庵の跡に「俊寛堂」が建てられている。さらに、俊寛の霊を慰めるために、毎年旧暦の七月十五日、大きな竹で松明をつくり、火をつける柱松の行事が行われている。しかし、俊寛の墓はない。

治承三年（一一七九）四月初旬、硫黄島から脱出した俊寛と有王は、外海の荒波のなかで木の葉のように揺れる船のなかでしっかりと抱き合いながら、船酔いに耐えた。俊寛は、このような苦しみを味わうのであれば、硫黄島で死んだほうが良かったかもしれないと思いながらも、いや、清盛に復讐するためには、これに耐え生き延びなければならないと言い聞かせつつ、歯を食いしばって耐えた。

やがて、阿久根、脇本の浜に無事たどりついた。島の緑が、海に映えていた。あの鹿ケ谷の山荘の謀議からまる二年がたとうとしていた。二人とも、くたくたに疲れていた。特に俊寛は、疲労と船酔いのため衰えが激しく病気になっていた。有王は、かねてからの打ち合わせどおり、脇本港入江にある漁師の親戚の家に連れていき、俊寛を介抱した。

ここは、小さな島が点在する複雑な入江で船の出入りも少なく、山や竹林に囲まれ、隠れ家としては最適なところであった。

俊寛は無事に救い出されたという安心感と気の緩みで、身動きさえできない状態であった。しかし、有王と漁師一家のあたたかい介抱により、しだいに健康を取り戻していった。

それから六カ月が過ぎた。

十月半ばの早朝、俊寛は波の音で目が覚めた。

俊寛「有王、有王はどこにおるのじゃ」

有王「はい、ここにおりまする」

俊寛「おお有王、私も大分元気になってきた、少し外の空気を吸いたいと思うが、

一緒にどうじゃ」
有王「はい、お顔の色もよくなられまして、私もお誘いしようかと思っておりました。」
俊寛「では、早速参ろう」
　有王丸を伴い、裏山に登った。久しぶりに見る青い空、木々の新緑がまぶしく、俊寛は自分が生きていることの不思議さと喜びの実感を味わっていた．大木の茂みを抜け、山道を過ぎると、竹林に囲まれた平坦な中腹に出た。
俊寛「有王、そこにみずみずしい葦があるぞ」
有王「どこですか、おお、見事な葦の群生ですね」
俊寛「有王、ここには、きっと湧水があるはずだ、少し掘ってみてくれ」
有王「はい」
有王は、近くにあった木片で力いっぱい掘り始めた。しばらく掘ると、水がでてきた
有王「俊寛さま、でましたよ、水があふれてきました」
俊寛「そうか、よしこのことを村人たちに知らせよう」
有王「はい、かしこまりました、村人たちが喜びますぞ」
　俊寛は、元気になると、僧としての使命や仕事師としての血が騒ぎ始めていた。お世話になった地元の人々に恩返しをしたいという気持ちもあった。この地域は、水不足で、主婦や子供が毎日水汲みに遠くまで行くという不自由な生活を余儀なくされていたことを知っていた。
　俊寛は、この湧水の地を井戸にするよう村人たちにすすめた。現在、この井戸は残存しており、「僧都川」と呼ばれている。五十年ほど前まで豊かな水がわき出て、地域の貴重な水源地であったという。俊寛は、ここに庵を建て、諸国を行脚する旅僧としてしばらく暮らしていた。
　それからまた一ヵ月が過ぎた。十一月中旬になり木々が見事に色づいていた。或る日の夕方、俊寛は有王を呼びだした。
俊寛「有王、最近、私は不安になってきた。そのうち、平家がここを見つけ出し、捕えられるのではないかとな、ときどきそのような夢を見るのじゃ」
有王「そうですか、私も時々不安になることがございます」
俊寛「そこで、そなたに頼みたいことがある。都の情報が手に入り、より安全な場

所は、寺院である。それも大きな寺院だ。近くにそのような寺院がないか調べてもらえないだろうか」

有王「はい、かしこまりました」

有王は、近くにある寺を探して回り、東の山門院野田に天台宗派の山内寺があることを一週間後つきとめた。

有王「俊寛様、ありました、よい寺がありましたよ」

俊寛「あったか、そうか、そうか、ありがたいことだ。仏様の恵みだな」

有王「はい、東のほうに野田という村がありまして、そこに山内寺という立派な寺がございました。この寺は、天台宗比叡山の末寺で、なんでも南九州の総本山のようでございます。性空上人の開山による山門院の古寺だそうです。境内は三町あまりで壮大な御堂がございました。ここならおそらく、京の情報も入り安全ではないかと思われます。」

俊寛「そうか、願ってもないお寺だ。早速、手紙を書くので、墨と筆をたのむ」

有王「かしこまりました」

俊寛は早速、丁重な手紙を書き有王に手渡した。

数日後、馬に乗って寺から迎えの者が二人来た。俊寛と有王は、親身になってもてなしてくれた漁師一家にお礼を述べ、有王が都から携えた「麻の帷子と袴」を贈り、庵の踏み石から馬に乗り、山内寺へと向かった。

ようやく安住の地を見つけることができ、俊寛は、これまで味わったことのない安堵感を覚えた。

後年、俊寛が住んでいたこの庵は、漁師一家が移り住むようになり、「僧都屋敷」と呼ばれ、漁師は江戸時代には「双津門」と名乗り、同家には「麻の帷子と袴」が家宝として保存されてきたが、太平洋戦争中に紛失したという。双津家は現在もあり、俊寛が馬に乗るとき用いた大きな踏み石だけが昔のまま、今も残っている。

それから一年、治承四年（一一八〇）十一月初旬、薩摩、出水郡野田の天台宗南九州総本山・山内寺の一室で、俊寛がひとり読経している。夕闇がせまり、ここ南国でも朝晩は冷え込むようになってきた。

そこへ、有王が興奮した面持ちで入ってきた。

有王「俊寛さま、ぜひお伝えしたいことがございます。入ってよろしいでしょうか」

俊寛「ああ、有王か、どうぞお入りなさい」

有王「俊寛さま、お慶びください、吉報でございます。昨日、京から来た僧に聞いたのですが、いよいよ、平家討伐に向けて源頼朝を中心として東国の武士たちが動き始めたようでございます。」

俊寛は、黙って目を閉じたままうなずいた。

俊寛「・・・・・・・そうか」

有王「一刻も早く、京へ戻りましょう。島を脱出してから一年、俊寛さまも大分お元気になられました。私といっしょに京へ戻り、平家打倒のために働きましょう。」

俊寛はかっと目を開き、有王を見つめながら

俊寛「有王よ、そなたのこれまでの働き、私はこころから感謝しておるぞ。私のような者に、命がけで今日まで尽くしてくれたこと生涯忘れぬぞ。だがなあ・・・」

俊寛はそう言ってまた目を閉じた。しばらく過去を振り返るようなそぶりをして、重い口を開いた。

俊寛「私は、この一年、毎日、早く起き、読経をして、掃除や草とりをしながらこれまでの人生を振り返ってきた。このような規則正しい清らかな生活はこれまでしたことがなかった。こんなに本気で読経したこともなかった。時がたつと昔のことがよく見えるようになるものだ。私はなんと傲慢な人間であったことか。法勝寺の執行として、八十余か所の荘園の管理を任され、四、五百人の家来を使っていたあの頃は、確かに驕りがあった。財政の責任を負いながら私は、自分の才能、能力ゆえにここまで出世できたと自負しておった。その驕りが、平家、清盛公の驕りを許せなかったのだ。しかし、本気で平家打倒を考えていたかと問われると、いささか自信がなかった。あの成親が、鶴の前という女性を紹介しなかったならば、あるいは鹿ケ谷の山荘を貸すことを承諾しなかったかもしれないのだ。さすれば、たとえ島流しにはなっても、成経、康頼とともに赦免されたかもしれない。

いや、今となってはそのことはどうでもよい。私が言いたいことはなあ有王、この一年で自分の真の姿がはっきりと見えてきたのだ。自分の力ではなく、多くの方々や仏様の力で生かされてきたことを心底から感じることができるようになったのじゃ。僧である私が今更こういうのも気恥ずかしいが、昔は「僧都」は名ばかりで心は清盛公と同じ欲と見栄の塊であったのだ。しかし、清盛公は私などよりはるかに政治力のある実力者であった。私はもうこれ以上、逃げるのは、やめたのだ。ここで、平家につかまっても、もう本望である。有王、そなただけ京へもどるがよい。

私は、もう一人で大丈夫だ。心配するな。」
有王「俊寛さま、島を脱出するまでの、あの平家への怨念と激情は、どうなされたのですか」
俊寛「有王、あれほど身を焦がした憎しみが嘘のように消えてしまったのじゃ、一番驚いているのは、この私だ。むしろ清盛公への感謝の気持ちがこみ上げてきた。この三年間の苦悩がなかったら、私は、本当に生れてきてよかったと心底から思うことはなかっただろう。この三年間の苦悩は、仏様が私に与えた試練であったのだ。私は幸せ者だ。硫黄島での二年の苦しい生活も、今ではなつかしく思い出される。小鳥のさえずりと波の音で目が覚め、海の幸と山の幸に恵まれ、食べ物は貧しくとも、とてもおいしかった。特に「大名だけ」と地元の人が呼ぶ長細い筍は、生で食べても甘くおいしかった。魚はみな活きがよく、島の人々はみな親切だった。ここ出水野田も同じだ。
硫黄島は、島流しにふさわしい絶海の孤島、これからも都からの流人が来るかもしれないが、島の豊かさに触れ、最後はきっと幸せを感じるだろう。私は、やりがいのある仕事をまかされ、鶴の前とはとろけるような恋をして、娘まで授かった。そして、有王、そなたという心からの親友を与えられ、命がけで私を救い出してくれた。こんな幸せ者はいない、のう、有王」
有王「俊寛さまー」
　有王は　絶句し、目にはあふれんばかりの涙が光っていた。
俊寛「有王、私はそなたのおかげでこうなったのじゃ。すべてはそなたの尽力のおかげ、ありがたくお礼を申しますぞ。」
　有王は泣き崩れながら「俊寛さまー」と再び叫んだ。
俊寛「有王、そなたはまだ若い。これから京にもどり仏に仕え、平家などに囚われず自分なりの自由な生き方をしてくれ。それが私の望むところだ。」
　有王は、しばらく泣きくずれてから、おもむろに顔を挙げた。
有王「俊寛さまは、これからどうなされるのですか」
俊寛「私は、ここでこのまま仏に仕え、島流しにあった者たちや処刑された方々の霊を弔いたい。京にもどったら、俊寛は、硫黄島で自害して果てたということにしておいてくれ。家族にもな。」
有王「承知いたしました。どうぞ、お体に気を使われて、長生きされますように」

有王は、じっと俊寛の目をみつめていた。硫黄島での、やせこけ目がおちこんでらんらんと輝いていた目ではなく、肉付きもよく、優しく慈愛に満ちた僧の目になっていた。

有王「わかりました。それでは、私だけでも、京へまいります。俊寛さまは、硫黄島で自害され、その遺灰をもって帰ってきたと皆様にはお伝えいたします。」

俊寛「それでけっこうだ。娘にも、そう伝えてくれ」

有王は、数日後、旅仕度を終え、別れを告げて旅立っていった。

俊寛は、姿が見えなくなるまでじっと見送っていた。目には涙があふれていた。寺の木々が色づき、銀杏や紅葉が見事に庭を埋め尽くしていた。

それから数週間後、俊寛は、葉っぱが落ちるように、急の病に倒れ、安らかに息を引き取った。死に顔は、すべての煩悩から解放された仏の顔であった。最期の俊寛は、最後の瞬間、仏になっていた。享年三十八歳。

山内寺は、丁重に葬り、境内に目立たぬように小さな土塚をたてた。その土塚跡には、延宝五年（一六七七）、鹿ケ谷の謀議からちょうど五〇〇年目に、地元の吉富十郎左衛門によって、三メートル余の自然石が建てられた。それは「俊寛僧都の碑」として、野田感応禅寺の近くにひっそりと残っている。山内寺は、度重なる火災と明治維新の廃仏毀釈によって跡かたもない。

有王は、その後、高野山で修業し、高野聖として、俊寛の霊を弔いながら、全国を行脚し亡くなったと伝えられている。

平清盛は、治承四年（一一八〇）俊寛が亡くなった年、二月に、孫である安徳天皇を即位させ、四月福原に遷都、全盛期を迎えるが、八月に源頼朝が挙兵、翌養和元年（一一八一）二月、熱病に倒れ急死した。そして、一一八五年、壇ノ浦の戦いによってついに平家は滅亡した。

硫黄島には、その後、壇ノ浦から逃れた安徳天皇と平家の落人が流れ着き、亡くなったという伝説と遺跡もまた、俊寛とともに残存している。